森の名手・名人シリーズ 51

林業（苗木づくり）
苗木の親父

名人　伊藤　勉（85）
岐阜県各務原市

聞き手　渡邉　錬磨
岐阜県立岐阜農林高等学校2年
平成30年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が認定されています。岐阜県においては、現在、51名の「森の名手・名人」が認定されています。

この「森の名手・名人」を「森の〝聞き書き甲子園〟」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたものの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

1. 苗畑の管理

苗畑は、伊勢湾台風の年（昭和34年）に、初めてクロマツの種を取りました。37年に蒔き付けて、38年の秋から松の苗を出荷しとって、その後ヒノキとスギを作り始めたんやわ。でも、最初は種が支給されなんだ。それから山の方の人に種とってもらって、うちで蒔いてやったんだな1年目は。2年目からは、県から種を買い受けてやったんだ。買取価格は一番最初はマツは1本7円やったかな。ヒノキは1本20円やったと思うわ。そのときからずっと56年間やっとるね。そのときは全部が手作業。備中で耕して、そこに手で植えたんやわ。8年続けてな、やっと耕うん機、トラクターが入ってきたもんで、今の1m35㎝の畝幅の畝をトラクターで作って、それに手植えして育てるっていう方法に変わって、40年ごろが出荷の最盛期やったと思う。そのあと、45年くらいに、岐阜県が1万ha造林を計画したんだわ。そのおかげで苗木がたくさん要るようになったもんで、苗木生産に今まで以上に力を入れて、もう、死に物狂いで働いて、苗を作っとったわ。

2. 苗木の世話

1月15日くらいから2月10日までにヒノキやスギの苗の選別。5㎝、10㎝、15㎝くらいの三段階に分けておく。それは、大きい小さいで競争させんようにそろえて植える。出荷のときに、そいつらを束ねて出すように。そのときにまだ小さい奴は、3月の中頃に新しいのを畑に植えるで、そのときに一緒に植える。

5月からは草取りだけやな。今は、スギは9月の末に根切り、ヒノキは10月になってから根切り、注文があるたびに出荷やな。

〈種蒔き〉

苗木を作るときに大変やったことは、種蒔き。始めは冷やしたらあかんで、藁を敷いとったんやわ。その藁をめくって、ついとる葉っぱを取るのが一番めんどくさかったな。でも、県は作れ作れっていうやろ。そこでいろんなやり方を試してみようと思ってな。今度は、葦簀を切って50㎝くらいの幅にして、上に載せたんやわ。次に、45年くらいから、南京袋を被せよった。始めは2枚被せて、10日くらいしてから1枚とって、そこからまた10日くらいしたら、もう1枚も取って、寒冷紗っていうビニールの繊維がいっぱい引っ付けてある、雨と風だけ通す目の粗い紙みたいなものを、夏中は黒の寒冷紗掛けて、氷が張るようになるとポフポフのやつを掛けるようにしたら、うまいことできたんやわ。その方法が確立してからは楽になった。一番最初にマツ育てとって、そのあと県から頼まれてヒノキやって、スギやって、それから、ヤシャブシ、ハンノキ、それをずーっとやってきたわ。どの木も最初は苦労したもんやわ。苗にも連作障害があるもんで、畑を変えて作っていかなあかんかった。ヒノキの場合は連作障害が起きると根が太くなっちゃって、山の人が植え難いっていうもんで、毎年場所を変えて育てとるわ。肥料は、植える前に全面にふるって、トラクターで起こしてから植えるんやな。そうするとずっと土の中に肥料があるもんで、根が伸びれば伸びるほど新しい肥料のところに行くもんで、綺麗に真下の柔らかい土のところに根を張るんだわ。

名人のスギ畑

ヒノキ畑

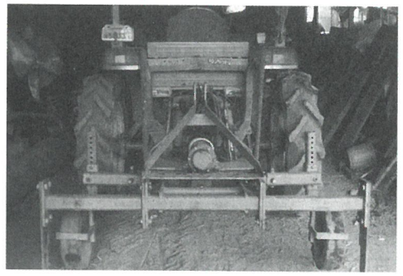
〈草取り・選別・自然との戦い〉

昔から見たら草引きが一番楽になったな。昔は草引きなんて全部人力やったもんで。草掻きと備中と鍬があっただけやで。とにかく大変やった。根切り虫にやられたときも大変やったな。原因がわからへんまま2、3年続いたでな。その間は何にもできんかったで。片っ端から薬をふりかけていったわ。それでやっとスタートラインやで、そこから、いい苗作ろうと思ったら、一年生からいい奴ばっかり世話せんとあかんわ。そこからさらにいい奴だけ選り好みしていかなかんな。一番最初から全部いい苗にするのは難しい。だいたい2割くらいは捨ててまうことになるけど、それくらいせんとお客さんは喜んでくれんで。あと、根っこと葉が、虫に食われて納品しきれんかったことがあってな。あのときは山にも畑にも苗がないっていって大騒ぎやったわ。ちょうどあのときに自然には絶対に敵わんなあって思った。天気だけやなくて、虫とか、病気なんかでもそうやと思う。

〈根切り〉

自分のこだわりで、枝振りが良くて丈の短い奴だけ出すことだけはずっと続けてきた。35㎝の苗は、幹の太さが7㎜、45㎝は9㎜、60㎝のが12㎜がベスト。団扇みたいな形の苗作るのが理想やわ。枝の付き方が綺麗なのが特にええわ。そういう苗だけ選り好みして山の人に出すことだけは貫いてきたんや。

そのために、自己流の苗の管理方法を編み出したんよな。一つ目は、寒冷紗は一年生から二年生になるときに掛けとかなあかん。掛けずに過ごして、植えかえると新芽が3本か4本くらい出てまう。そうするとまっすぐに伸びてかんようになってしまうもんで、寒冷紗を丁寧に掛けなあかん。二つ目に、苗の大きさは35㎝、45㎝、60㎝の規格があって、根切りで成長を止めて、規格どおりの大きさにするんやけど、その前後1週間の天候やら気温によるもんで、そこを天気予報見て、的確に判断しなあかんのよ。そこで、切った後1週間は晴れる日を狙って根切りをしてやる。



根切りに使う機械

3. 日本の代表として異国に立つ

〝タイ植林ツアー～岐阜県の森建設～〟っていうのがあって、1993年からそれに技術者として呼ばれた。タイの土はかっちかちの赤土で、畑もロータリーが使えなんだ。山肌全面鋤（すき）で鋤いて土を細かくしてスギの木を植えたんや。あっちは乾季と雨季があるで、半年間絶対に雨降らんのやって言われて、日本と気候が違ってだいぶ考えたわ。あっちはチークしか育ててなかったから、日本のスギが育つかどうかもわからんくて心配やった。まあ1年でこんなに大きくなったんやけどな。

結局、全部で6年かかった。最初が大変やったでなぁ、あっちの山間民族が生活に必要やっていって木を全部切ってしまってなあ。はげ山やったんやわ。そこからやで根付くかもわからんかったもんで、1年待ってみて、根付きはいいし、よけ育ついうことがわかったで、岐阜県の森を再現して作ったんやな。

4. 今の畑

今作っとる苗はマツとスギとヒノキ。スギの中でも、日本のと中国から入ってきた奴と2つあるから4種類だな。日本のヒノキはコンテナ苗と普通の畑に植えてる苗とあって、最近はコンテナ苗の方が人気だわ。中国から入ってきた奴は、ここらでは、うちが初めて蒔いて、今年で2年目やわ。今、苗木に使っとる畑はマツは10aくらいやね。ほんで中国のスギが30aくらいで、日本のスギが20a。ヒノキは1～1.5haくらい作ってたと思う。最盛期はヒノキだけで1年間でだいたい35～40万本くらい出荷してたわ。もう今は、苗木は全部で2haくらいかな。外国から安い材木が入ってきてまったで植えても売れへんって言って、皆買わんくなっていったわ。

5. 苗木作りを日本から消滅させないために

苗木やめてないのには理由があって、今は付き合い長かった森林組合が、少しずつでも植えとるで、そこから仕事がくるで。揖斐、根尾、郡上、飛騨、恵那と5つあるけど、みんな少量発注やな。多くても5千本、皆普通は3千本やな。若い人にもやってもらうといいと思うけど、苗作っても売れんでいかんわの。日本では需要が減ってきてまったな。国も日本の森をもっと手厚く守らなかんな。最近は跡継ぎがいないっていうところが多いけど、うちは息子が継いでくれとるよ。3年くらいよそで修業させてからやけどな。

これからは、みんなでこの畑をどこまで守っていけるかが問題やな。欲をいうとすれば、国にもう一度動いてもらって、人数増やさんでもいいで、今の人たちを守ってほしいっちゅうことやな。昔は同業者もいっぱいおったでなぁ。最盛期で、県内だけで300人はおったけど、今では7、8人しかおらんわ。需要と供給が成り立たんくなって、激しい時代の移り変わりで淘汰されてきたんだわ。でも、忘れてしまったらあかんで、この技術を岐阜県に残していくことが目先の目標やな。

名人　伊藤（いとう）　勉（つとむ）さんのプロフィール

●生年月日：昭和8年7月30日生まれ
●職業：苗木生産、野菜生産

昭和37年から山林種苗生産に取り組み、増大する拡大造林を背景に、ヒノキを中心に年間60万本以上まで拡大したが、植栽面積の減少により、生産規模の縮小を余儀なくされる中、山林種苗生産を継続し、近年では、新たにコンテナ苗生産にも取り組み、岐阜県の森林づくりに大いに貢献している。

昭和52年から各務原山林種苗組合長を務め、組合員への指導とともに、息子へ山林種苗生産を引継ぎつつ、技術承継に努めている。

森の名手・名人シリーズ最終回にあたって

平成19年12月号に第1回を掲載して以来、不定期に連載して参りましたが、第51回をもって、ひとまず終了いたします。長い間、ご愛読いただきありがとうございました。

なお、今まで掲載してきました分を当委員会ホームページに掲載しております。森の名手・名人の皆様のご功績やお人柄を思い浮かべていただければ幸いです。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
公益社団法人
岐阜県緑化推進委員会　専務理事　黒崎隆司】